

同志社とボーダーレス社会

児玉実英



近ごろ話題になっている本に『ライジング・サン』という小説がある。これはマイクル・クライトンの書いたアメリカの国際産業探偵小説で、舞台はロサンジェルス。日本のある企業が進出し、ダウンタウンに超高層ビルを建て、名士を招いて新築披露パーティーを開いている最中、その上の階で、白人のモデルが殺される、というところから始まる。担当刑事のトム・グラアムと、応援を頼まれたスミス警部補、そして日本通のベテラン刑事コナーの三人が、さまざまな捜査妨害を巧みにのりこえて、事件の謎を追っていく。そして最後に、容疑者とされた日本人が、超高層ビルから飛び降り、事件は迷宮入りになってしまう。

日本人にとって、あまりあと味のよいストーリーではない。その上、この間、日本嫌いのグラアムが、ときどき露骨なレイシズムを口にする。それに対してコナー警部は、できるだけ冷静に日米

社会習慣を比較して、後輩のスマスに解説しようとする。しかし、そのコナーでさえ、ときに困った解説をする。

「日本では、よくライバル企業の警備員を買収しようとする。日本人は、名誉を重んずる民族だが、伝統的にそういう行為は許容されるんだ。……日本人にとってビジネスは戦争にほかならない。」

（酒井昭伸訳）

この小説は、日米の経済摩擦、文化摩擦が底流にあり、反日感情をあらわにするアメリカ人も日本人が登場するので、全体として、日本たたきの印象を与えると、アメリカにおいてさえ、反発する読者が多いのも、むりからぬことである。

たしかに一九八〇年代のはじめころ広く読まれたラストベーターの小説『ニンジャ』と比べたり、さらにさかのぼって第二次大戦後に多く読まれたミッチナーの小説『さよなら』と比べたりすると、日本のイメージが甚だ悪くなっている。日本はもはや、遠く美しく「ふしぎな国」でなく、金の力で「好き放題」をやる「えたいの知れない」国として描かれている。大変残念なことである。

しかしこの小説をよく読んでみると、作者が提起しようとしている問題は、日米関係でも日本人論でもなく、ボーダーのない無法社会への警告のようだ。たとえば「アジア人風の顔つき」の少年ギャングが白人刑事の家を襲ったり、マスコミが警察を非難して捜査を難航させたり、上院議員が日本人のあやつる女にひつかかって自殺したり、これは、まさにボーダーレスの社会の無法無秩序状態を浮きぼりにしたものである。このありさまを強調して描きつつ、作者はこれに警鐘をうち鳴らしているようだ。彼は、ロサンジェルスだけでなく、これは、ニューヨークでも同じなのだといっている。

現代は、ボーダーレスの時代だと、よくいわれる。たしかに旧ソ連が解体し、冷戦時代のような米ソのボーダーがなくなった。ロスやニューヨークをはじめ、世界の大都市も、異文化が混在するボーダーレス社会になってきている。そういえば、日本の政官財界のボーダーも、また身近なところでは学問領域のボーダーも、なくなってきた。

もともと他方ではボーダーを強める傾向や、旧ユーゴのように新しいボーダーを作ろうとする動きも見られないことはない。世界は、今、新しいボーダーを作ろうとする勢いと、ボーダーを破ろうとする勢いが、激しく作用しながら、全体としてボーダーレス社会へと動いていっているようだ。日本ではボーダーレスは、なにかよいことのように思われている。たしかに境界がなくなること、自由と解放を意味するが、ボーダーレス社会の現実、実は価値や秩序の大混乱でもあるのである。このような時代にわれわれは、好むと好まざるにかかわらず、はいろいろとつつあるようだ。そのようなとき、われわれは、どう考えていけばよいのだろうか。たしかに変化に対応する智慧や力を養うことも大切だろう。しかし、より重要なことは、混乱や無法の中にあって一人一人が、確かな倫理感をもつことではないだろうか。そしてさらに大切なことは、ことばや文化を超えた信頼と共生への意志をもちつつ、新しい秩序と価値観を模索していくことだろう。

同志社が新島先生らしい伝統的に守ってきた価値観を振り返ってみると、この時代に非常に重要な示唆を与えるように思える。キリスト教信仰、良心教育、自由主義、国際主義、隣人愛——これらは、ボーダーレスの時代において、まさに今、きわめて高い価値をもつものではないだろうか。同志社の生きた伝統を大切に、再評価しつつ、新しい時代に対応していくことができればと念じている今日このごろである。

(女子大学学長)

新しい出発のために

石原信実



香里が同志社の一翼を担って誕生したのが一九五一年、同志社創立百二十五周年の二〇〇〇年の翌年には、五十周年を迎えます。教育が百年あるいは二百年の計とは言え、五十年は一つの歴史です。

私は初代校長山田先生の警咳に接することはありませんでしたが、先生の祈りと情熱によって築かれた礎は、その後、教職員の総意を集めつつ発展し、今日に至りました。先生と苦楽を共にされた諸先進も、みなさんご定年で退職され、教職員も新しい時代に入り、さらに二〇〇〇年には、私を含めて陣容は一変しています。半世紀を闊した新しい出発がまもなく始まろうとしているのです。

ところが、折も折、この祝うべき時は、生徒減による「私学危機」の時代と言われています。「私学冬の季節」の到来です。

この時代を正しく舵取りし乗り切るために、過去の歩みを大切にしつつ、新しい知恵の結集が求められています。この時に、校長に就任することの責任の重さを思うとともに、次代の人のために、新しい革袋の用意をするのが私に与えられた責務だと思っています。

就学適齢者の減少は諸統計の示す通りであり、過去数年の漸減期に一定の志願者を維持できたのは、九十五パーセントを超えるまでに至った高校進学率の伸長と、私立中学校志向の飛躍的な増大に支えられたからだと思います。しかし、両者の伸びにも限界があり、またそれを超える生徒減、経済的要因などを考えると、このまま手を拱いているなら、志願者の減少は必至であり、すくなくとも、期待する生徒の確保は難しくなることでしょう。

この「数字上の危機」に対して、香里は、老舗「同志社」の暖簾に頼っていれば、心配はいらないと言われていることがあります。たしかに本校を志願してくる者は、ほとんど全員が同志社大学への進学を希望しており、一定の志願者は確保できるでしょう。しかし、中学高校は決して大学への通進点ではありません。いずれに雄飛しようと、生徒一人一人が香里に学んだことを喜び、誇りに思うことのできる学園でなければ、苦しい時代には取り残されてしまうことでしょう。「深山大沢のごとくになし、小魚も生育せしめ、大魚も自在に発育せしめ、小魚大魚各々その分に応じ」た活力溢れる学園こそ、「危機」と言われる時代にも動じないものと思います。

教育は本来保守的なものであり、文部行政のごとく社会の動向を見つづ十年毎に見直しをするときには疑問を感じます。この四十年余、私たちは当面する課題に追われてきたこともありましたが、世事に比較的背を向け、内なる充実に意を注いできました。しかし、新しい時代を迎えようとする今日、新しい装いのために長期的な展望に立った教学、経営、施設設備、機構等諸方面からの検討

が迫られています。

そこでは教職員一人一人の力量が問われ、試されることと思います。そして、出発時に掲げた「和気満堂」を今一度思い起こし、五十周年に備えたいものです。

「患難」が「希望」を生じること信じます。「私学冬の時代」は、教職員にとって、やりがいのある季節かもしれないと思っています。

(同志社香里中学・高等学校校長)